

「ブラジル宣教」

2014年05月12日

昨日の11日（日）、横浜本郷台教会で、小井沼眞樹子宣教師の説教とブラジル宣教報告を聞いた。夫の國光師は日本聖書神学校を卒業し、妻・眞樹子師は独学で、ご夫妻共々、50歳を過ぎて牧師になられた。國光師が会社員としてブラジルに駐在していた時、通っていた日系人教会の「サンパウロ福音教会」から招聘され、宣教師として赴任された。そして10年間、伝道、牧会に当たられた。私は「小井沼宣教師ご夫妻と共に歩む会」の事務局を担当した。ブラジルは移民、コーヒー、サッカーくらいしか知らず、遠い国であったが、ご夫妻の宣教活動を通して、近い国になった。國光師は難病になり、残念ながら召された。眞樹子師には大きな悲しみであったが、夫の遺志を継ぎ、ブラジル宣教を決意された。ブラジル東北部ノルデスチ地方、オリンダの「アルト・ダ・ボンダーデ」というメソジスト教会に招かれた。この地には一人の日本人もいない。南緯7度くらいに位置する熱く、貧しい地域である。そこに行くという眞樹子師の決断に驚き、感銘を受けた。今回も「小井沼眞樹子宣教師と共に歩む会」の事務局をお引き受けした。

一期3年の一期を終え、二期目の2年が過ぎた。5年間の経験と働きを感銘を持って聞いた。16世紀の始め、ポルトガル人が入植した。もちろん、宗教はカトリック教会の支配であった。先住民は労働に適さないと、アフリカから黒人を奴隷として入れた。その後も、多くの国々から移民が入ってきて、多民族、多文化の国になった。この間に作られた、弱者を疎外する社会システム、人間であることを否定した奴隷制度が残した傷跡は大きく尾を引いている。現在、世界の7番目の経済大国になったが、貧富の格差が大きく、サッカーのワールドカップに反発するデモも起こっている。

眞樹子師が遣わされたノルデスチは貧しい地方で、教会に集う人々は誰もが、極貧に喘ぎ、体や心を病んでいる。その中で、眞樹子師は当初、言葉が通じず、異文化に慣れず、孤独を強いられた。また、友の悲しい死や世話をしていた少年との軋轢などで、うつ状態にもなった。しかし、教会員から優しく受け入れられ、喜びと平安を得ていった。そして、神に叫び求める無垢な信仰、小さな喜びを感謝する、信仰と生活の一致、お互いの命を分かち合う愛の交わり、そこに復活した主イエスが生き生きとおられることを知らされた。弱さや行き詰まりを通して、与えられる大きな恵みを力説された。眞樹子師の説教はご利益宗教を求める風土の中で、福音によって自立を促される真実を伝えている。また、教会の事業に大きく貢献し、頼りにされている。残り1年、有益な宣教活動がなされるであろう。

眞樹子師はキリスト教界の逆転を語っていた。ポルトガルから来たキリスト教は人を支配する男の宗教であった。そのキリスト教が、ブラジルでは地べたを生きている民衆の間で、愛を分かち合う主イエスの福音として息づいている。力で教え込まれたキリスト教が、本来の命を回復し、原点に立ち戻っている。これからのキリスト教界のあり方を指示している。